

四谷の

千枚田だより



第 276 号



今年の作柄 豊作を願う

出穂は平年より3〜4日早く、順調に推移しているとほくそ笑んでいたが何となく「しいな」が多いような気がする。そこで鳳来寺小と我が家の田んぼの稲穂の実入りを計測してみた。

稲一本当たりの粒数(ミネアサヒ 鳳来寺小 115粒 不稔米15粒 我が家 129粒 不稔米18粒 不稔米は全体の約15%が平均値といわれていることから良とした。稲は出穂して約1週間かけて開花、受粉花が開く寸前に自分の花粉をつける自家受粉(風媒花)で、朝から晴れた日の正午前1〜2時間しか花が開かない。それが今年の開花は2日ほどしか見られなかった。登熟歩合に期待する。

心配する害獣被害

食性の進化からニホンジカもサルも稲穂を食べるようになってしまい、昨年は大きな被害が発生した。今年もすでにサル軍団(20〜50匹)が来襲、サル追い合戦だ。

8月〜9月初旬の天気

記録的豪雨が相次いだ一方で「月間降水量ゼロ(西日本など)」の地点も。宇連ダム(鳳来湖)も貯水率0%

四谷の千枚田だより

おかげさまで23年間継続発行できました。千枚田保存継承、地域のできごとなどを皆さんにお届けできればと思っています。応援・アドバイスを願っています。少し、レイアウトを変えました。

であったが7月にはほぼ満水に、その後10年ぶりの少雨で9月4日の貯水率は約2割(約60万トン)まで減少、節水が強化され、ダムの恩恵に依存している渥美や田原の農家は「やばい」と嘆いているとか。そんなこんなの中で収穫期を迎えた千枚田の百姓は九州・沖縄周辺でウロチョロしている台風24号の影響で降ったり降らなだりの雨に惑わされている。田んぼで行き交う百姓の会話は「やるせないノン：まいっちゃうゾン」と、お互いに気をもんでいる。どうも、中旬ごろまで「やるせない」と嘆く会話が続きそうだが、お天気には勝てない。また、気温もかなり極端で連日うるような猛暑が続いたが、9月5日には「こたつ」に足を突っ込んだら気持ちよくなった。昨年は夏と冬の2季であったが今年は春夏秋冬であることを願う。

「志多ら」ユーチューブ制作

8月30日、志多らのメンバーは奥三河の豊かな大自然と山あいの里「四谷の千枚田」をバックに動画撮影を行った。

収穫の秋を迎えた四谷の千枚田を舞台に幻想的な篠笛の音と迫力ある太鼓のコラボレーションは「えも知れず：何とも言い難い」感動の瞬間を醸し出した。

山間に木霊する笛や太鼓の音に耳を傾けた地域住民は「：すごい：涙が出たぞん：」と、わざわざ寒狭川の天然鮎を焼いて届けてくれたりもした。

思えば平成27年9月5日、第11回全国棚田(千枚田)サミット開催10周年記念シンポジウム 地域の宝これからの千枚田保全について探る〜みんなで語ろう千枚田〜をテーマに開催。その、アトラクションとして心の通う協力をお願いいただいた。迫力のある演奏はもとより地域住民も舞台に上り太鼓を叩くなどの親密感は今でも語り草となっている。今回の企画・撮影で、何とか少しはお返しができたとも思っている。

※動画は10月1日からYoutubeに配信される。

志多らの概要

メンバーは隣接地の東栄町に移住し、町民として生活、独自の感性で創られた「創作和太鼓」を中心に全国ホールツアー、海外公演、イベント演奏を行っている日本トップ

レベルの演奏家集団である。
※9月13日、新城文化会場で「音還〜おんがえし〜」が公演された。



東三河県庁と愛知大学の連携による四谷の千枚田の保全プロジェクト



「9月5日、中日新聞 東三河版に掲載された記事を転記」

千枚田 愛知大生つなぐ

新城・四谷 稲刈りやはぎかけ体験
国の「つなぐ棚田遺産」にも認定された新城市の「四谷の千枚田」で四日、愛知大の学生8人が稲刈りやはぎかけを体験し、棚田の保存への理解を深めた。愛知大生が東三河県庁と連携して進める保全プロジェクトの一環。担い手の減少や鳥獣害といった地元の課題解決を目指し、学生らが稲作体験や関係機関との交流を得て施策を練る。

8人は5月末に田植え後の草取りも手伝った棚田の一角で頭をたれた稲穂を刈り取り、ひもで結んだ稲束を棒にかけた。

地元の鞍掛山麓千枚田保存会からシカやサルなどの食害が深刻化している現状も聞き取った。今月下旬に施策のプレゼンテーションを控えており、地域政策学部一年の西口京吾さんは「稲作の大変さが伝わった」と振り返り、棚田に人を呼び込む方策を提案したいと話した。

保存会の小山舜二会長は「疲弊する中山間地で行政と連携して若い学生たちが取り組んでくれるのは心強い」と期待を寄せた。

全国の棚田を訪れて 応援しよう！

（小林大晃記者）

「全国棚田行脚！キャンペーン」農林水産省は、7月15日から11月30日まで、全国213の棚田を対象としたデジタルスタンプラリー「全国棚田行脚！キャンペーン」を開催している。

棚田は、美しい景観をつくるだけでなく、国土の保全、水源のかん養、自然環境の保全、伝統文化の継承など、農業・農村が有する多面的な機能を発揮している。一方、人口減少や高齢化による担い手不足などにより、棚田の維持・保全は年々厳しさを増している。棚田を守っていくためには、農業者の取組を支えるとともに、多くの方々にその価値を知っていただくことが重要である。今回のキャンペーンでは、スマートフ

オンのGPS機能を利用して全国の対象棚田を訪れることで、デジタルスタンプを集めることができる。スタンプ数に応じて認定証を取得できるほか、景品への応募もでき、棚田を実際に訪れ、その美しい景観や、そこで営まれている農業・農村の暮らしに触れることは、棚田の価値を知り、地域を応援するきっかけにもなる。



是非この機会に、全国各地の棚田を訪れてみてください。

※ チラシ（応募方法など）は千枚田入口ボックスにあります。

外来植物の伐根駆除作戦

横浜ゴム新城工場生物多様性保

全チームが主導で産官民連携交流体験研修を東海農政局、市職員、法人、企業、保存会などに呼びかけ9月10日、四谷の千枚田で生態系に被害を及ぼす恐れのある外来種「アメリカセンダングサ」「セイタカアワダチソウ」などの駆除を行った。挨拶に 昨年に引き続き重点対策外来種アメリカセンダングサの駆除のお礼と同種は成熟すると「ひつつきむし」と呼ばれ、衣服に付く「つかも」でまったくの厄介者である。草刈り時にはヤッケを着用すると効果がある。と紹介も兼ねた。

ニュース拾い読み

一昨年夏に始まった「令和の米騒動」の品薄・高騰から一転して、現在はコメの在庫過剰と価格の下落（コメ余り）が大きな課題となっている。今年半ば以降、民間在庫が過去最大水準に膨らんでおり、店頭価格の下落が続き、新米の流通に伴って古米が安値で売られるなどの「逆転現象」も起きている。農林水産省は需給安定化を図るため、過去に放出した政府備蓄米の買い戻しを表明。度重なる価格高騰により消費者の買い控えや、パン・麺類への移行が進み、価格の低迷や資材・燃料価格の高騰が重なり、生産者の経営環境が厳しさを増している。

行 令和八年九月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
発 文 責 小山舜二